キュリー夫人の理科教室

「マリー・キュリーってどんな人？」

吉祥瑞枝 (東邦大学理系) e-mail: min-ko@max.bi-ho.ne.jp

1. サイエンススタジオ・マリー

2002年「サイエンス スタジオ・マリー」はアートとサイエンスの融合を
掲げ子供たちや若い女性、お母さんに
“科学に親しむ、楽しでもらおう”
と結成。「日本伝統の紙芝居」の手法で
絵、楽曲、映像を強調し、わかりやすく
楽しい演出を目指している。2003年
にマリー・キュリーのノーベル賞受賞
100周年を記念して紙芝居に取り組んだ。

世界的女性科学者たちは、キュリ
夫人は最も有名な女性科学者で、
傑出した20世紀の巨人の一人である。
“キユリ家の人々”、“キユリ夫人伝”、“ビーエル・キユリ伝”を読ん
で感動した人も少なくなく。キユリ
夫人はラジウムの発見者として、ま
た1903年、1911年に物理学賞、化学賞
の2度のノーベル賞を受賞。絵本、フ
ラン紙、切手、文具、マンガ、翻訳本、教科書、文学、テレビ、ビデオ、
映画（“キユリ夫人”アメリカ モノ
クロ映画1946年初公開、およびフランス映画
“ジェッフの動体”1998年初公開）、
さらに演劇“黒髪親子の喜劇キュリ
夫人”としても多くの紹介されている。

新渡戸稲造によると彼が組織したユ
ネスコの前身「知的協力委員会」のメ
ンバーであったマリー・キュリーの印
象は極めて悪い。キュリーは科学の
舞台をはとんど無視したことなく、
珍重されたその素晴らしい衣装を
つけ、まことに実験のために暗室を
送るゆえであろうが、常に黒い眼鏡を
かけているので、いつも見栄えがし
かない、ちょっとしたところ憂鬱もなく
交際の嫌いな人である。と述べてい
る。

しかし、エーヴ・キュリーのキュリ
夫人伝によると、キュリー夫人はス
ポート好きで、自転車で新婚旅行した
ほどである。マリー・キュリーは飛ん
でいる性質の明るさをもっている、い
つも3冊のノート：研究ノート、
育児ノート、家計簿をもっていた。
研究が大好き、料理上手、
娘さんの教育に熱心で同僚と
“キュリー夫人的理科教室”を
開いた。後年、この授業を受け
た僑イレーヌは人工放射能の
研究でノーベル賞を、娘娘2代受
賞。

2. キュリーと紙芝居

現在、日本には約1千ほどの
紙芝居があるが、マリー・キュリ
リーのものは見当たらない、子供向けに
見やすい作品を制作し続けたいと思う。キ
ュリー夫人的資料収集に1年をかけた。
東京電力・電気の文具館に資料調査に
行った経緯で、2004年と2005年の2月電気
の史料館開館記念日に公演した。

また、ラ・ヴィレット科学産業シ
テティックで2005年世界物理年アイアンシュ
タインの展示コーナーを見た（図1）、
マリーとアイアンシュタイン（ラジウ
ム放出する膨大なエネルギー）について
はE=mc²について議論がスイ
イスの山を背景にたたずんでいる姿が大
きな重ね重視に転写されているが、見
慣れている構図とは反対で印象が深
いのがあった。

1995年4月パリでマリーとピエール・キュリ
ールの改葬が当時のミ
テランフランス大統領と共、フローズンマンを
ラジウム大統領の遺産のもと盛大に催さ
れた、この式典に先立ち、両棺の残存
放射能の測定が行われた。マリーの手
にはラジウム研究所のバールキニのつ
る薔薇の花が保存状態もよく残されて
いた。マリーの棺はそれほどもなく、
一方ピエールの棺のなかの放射能レベル
は相当高いものであった。マリーは
66歳で再生産の貧困で亡くなってい
るが、これは第一次大戦時に前線負傷
兵診断に使った抗体・キュリー（X線
装置に高濃度に投射されてなかった）
による被爆といわれている。

ところで、マリーの最後の実験ノー
ト（1919-1933年）が明治大学器児記念

図1  世界物理年マリーとアイアンシュタイン  於り・ヴィ
レット。
3. 日本語出版と理科実験

“キュリ夫人の理科教室”という名の理科実験出版**について、2003年の秋からマリー・キュリ夫人の実験を模倣したものである。東京大学での実験は、大熊秀子が主催しており、この実験は、マリー・キュリ夫人の生きた時代と同じような状況を模擬したものである。

**日本の理科実験出版

マリー・キュリ夫人の実験内容は、1913年から1933年までの間に、ニューヨーク市立大学で行なわれたものである。この実験は、マリー・キュリ夫人の実験内容をベースに、科学実験の伝統を守りつつ、新しい実験に応じたものである。

実験の内容は、マリー・キュリ夫人の研究を再現し、科学実験の伝統を守りつつ、新しい実験に応じたものである。

実験の内容は、マリー・キュリ夫人の研究を再現し、科学実験の伝統を守りつつ、新しい実験に応じたものである。

実験の内容は、マリー・キュリ夫人の研究を再現し、科学実験の伝統を守りつつ、新しい実験に応じたものである。